

チームによる調査・実践研究活動を通じた教育支援協働力育成

- ◎倉持 伸江（東京学芸大学教育学講座生涯教育分野）
○前田 稔（東京学芸大学教育学講座生涯教育分野）
柴田彩千子（東京学芸大学生活科学講座生活科学分野）
新免 歳靖（東京学芸大学広域自然科学講座文化財科学分野）
代表者連絡先：kuramoch@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】

教育支援協働、修士課程科目、調査・実践研究活動、サービスラーニング

1 はじめに・本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、2019年度に新たなコンセプトのもとに設置された修士課程教育支援協働実践開発専攻基盤科目「教育支援協働学概論」の取組みを通して、教育支援協働力の育成を図る大学院科目のカリキュラムや指導体制のあり方について検討し、提起することを目的としている。

教育支援人材としてのジェネラルな能力を育てることを目的として設置され、教育支援協働実践開発専攻の教育 AI 研究、臨床心理学、教育協働研究の3プログラム約90人を対象とした専攻基盤科目である。すでに確立した各プログラム・研究領域の高い専門性の習得を目指す従来の大学院教育に近い専攻基礎・展開科目に比べて、教育における協働・支援の知識と実践力を育成することを目指す本科目は、教育支援協働学そのものが構築過程であることも加わり、受講学生たちの意欲を喚起し主体的な探究主題として据えることの困難さをどう克服し有意なものにしていくかに課題がある。また担当教員のティームティーチングのあり方も模索途上である。

そこで、本授業の立ち上げからカリキュラム改善を継続的に担当してきた教員4名が2021年度における授業実践を省察しつつ、受講学生へのアンケートおよび聞き取りからその成果と課題を整理することで、修士課程における教育支援協働人材の教育・養成カリキュラムおよび授業運営についてのあり方について検討することが本プロジェクトの目的である。

2 本プロジェクトの内容等

(1) 2021年度「教育支援協働学概論」授業実践の省察

本授業のねらいは、「「激変する時代における教育現場が抱える様々な現代的課題に応える「教育支援協働」について、理論と実践の両面から学習し、教育支援協働に取り組んでいくうえでの知識・技能・マインドを習得する」と設定している。2021年度は、教育 AI 研究、臨床心理学、教育協働研究の3プログラム計81人の受講があり、前半を教育支援協働に関する理論や制度などについての講義や議論、後半をプログラム混合の12チームによる教育支援協働活動に関する調査・実践研究活動に主に取り組んだ（図表1）。各チームは学芸大 Explayground（産官学民で主体的に自分の「好き」「面白い」「課題」を持ち込み、「ラボ」と呼ばれるプロジェクトを形成し、新しい公教育のモデルを提案する組織体）の12のラボやプロジェクトと連携し（図表2）、研究成果をグループ発表し、チームレポートとしてまとめた。

今年度の主な改善・工夫点は次のとおり。①チームの研究活動に「実践」の要素を加え、「調査」「実践」「分析・発信」の3要素にわかりやすく整理した、②プログラムに加え学習経験や年齢、国籍などより多様なメンバー構成となるようグループを編成した、③コロナ禍でも対面活動を取り入れるなどチーム内でのコミュニケーションを円滑化した、④学習意欲を喚起しつつ過度な負担を強くないよう学習内容・課題を精選した。

図表1 授業スケジュール

1	4/15	オリエンテーション
2	4/22	講義:教育支援協働の理念
3	5/6	講義:チーム学校と教育支援協働
4	5/13	Aクラス(対面):自己紹介、チーム活動の計画 Bクラス(オンライン):各領域の教育支援協働について
5	5/20	第4回のA/Bクラス内容入替
6~10	5/27 ~	隔週で対面でのチーム活動
	7/15	Aクラス(対面):5/27,6/10,6/24,7/8 Bクラス(対面):6/3,6/17,7/1,7/15
12・13	7/29・8/5	発表 ふりかえりとまとめ

図表2 チームと協力先ラボ・プロジェクト一覧

チーム	協力先ラボ・プロジェクト	リーダー	担当
A	GREEN TECH ENGINEERラボ	鉄矢 悦朗先生	倉持
B	変人類学研究所	小西 公大先生	
C	基礎学力育成社会システム開発プロジェクト	松田 恵示先生	
D	いごこチーム	萬羽 郁子先生	柴田
E	放課後まほらbo	小森 伸一先生	
F	教科へのゲーミフィケーション導入プロジェクト	関口 貴裕先生	
G	Edu Knot Lab	南浦 涼介先生	新免
H	ワーケーションラボ	木村 守先生、金子 嘉宏先生	
I	こどスクール(codoschool)	田嶋 大樹先生	
J	Möbius Open Library (MOL)	高橋 菜奈子さん	前田
K	VRラボ	木村 守先生	
L	東京学芸大学ヒューマンライブラリー	岡 智之先生	

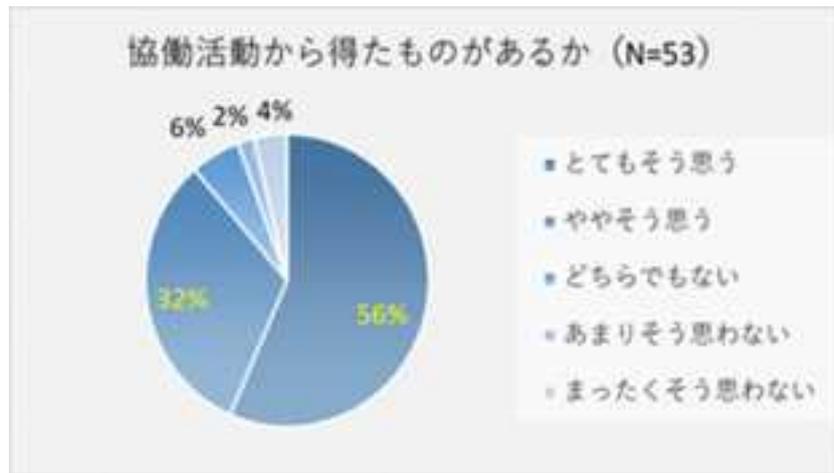
(2) 学生アンケートの結果分析

授業後に行った学生へのアンケートは、53名から回答があった（WebClassで実施、無記名、回答率65%）。他の院生との協働活動やチームのプレゼンテーションの成果などの質問について肯定的意見の比率はおよそ9割に達しており、授業プロセスについては高い評価が得られている（図表3）。一方で、「教育支援協働について実践的な力量が育成されたか」「教育支援協働についての見方が変化したか」という質問に対しては、プログラムによって評価に差が表れる結果となった（図表4）。領域において協働が求められる状況認識との違いと専門性を学ぶことへの期待の存在が推察される。さらに、社会人と留学生については、他に比べ同じ質問項目の評価が高いことが明らかになった。

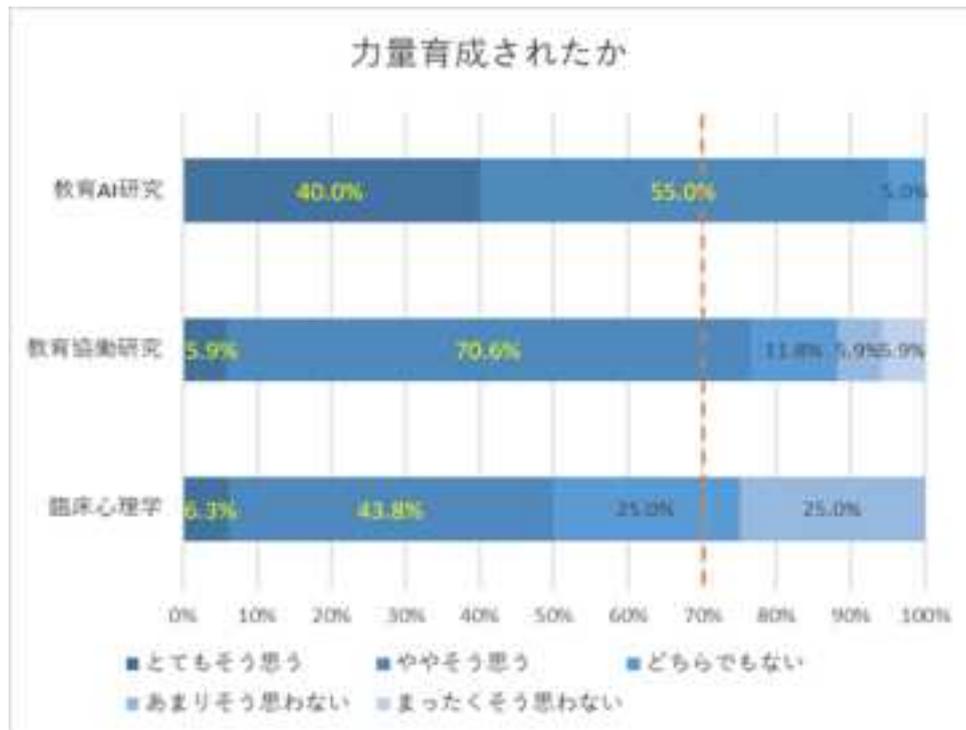
(3) 授業の成果：授業後の展開

本授業のアウトカム評価として、Explaygroundのラボとチーム活動を経験した受講生の有志が、自主的にラボを発足したことがあげられる（2020年度：防災教育ラボ、2021年度：お天気ラボの設立）。その後、ラボのメンバーを中心に学部生も巻き込む活動に発展し、三鷹市主催の「学生によるみたか未来研究アワード」において、「協働するコミュニティの構築」をテーマとした地域づくりの提案を行い、2年連続で最優秀賞を受賞した。次年度の本授業におけるチーム活動には、上記のラボも参加する可能性があり、受講年度を越えた院生同士の縦の交流の可能性が生まれつつある。

図表3 学生アンケート結果①



図表4 学生アンケート結果②



3 課題と展望

構築過程であり多義的な「教育支援協働」の概念の現代的意義や理論的構造の理解をさらに促しつつ、チーム内・チーム間の負荷の差へ対応したプログラム、授業運営に向けた改善の必要が明らかになった。またチームによる調査・実践研究活動が、連携先である Explayground との連携・協働活動を通して社会と接続する学習・研究活動、高品質かつ継続的なサービスラーニングとしての可能性を持つことが見いだせた。

学問的専門領域を越境して教育における協働・支援の専門的知識と実践力をいかに育成するか、受講学生たちの意欲を喚起し主体的かつ協働的な探究活動をいかに有意なものにしていくかの検討および試行を、3プログラムの教員をはじめとした大学教員や、教育支援専門職、教育支援現場の当事者とともに進めていく必要がある。

来年度、再度「大学院教育改善に関する研究プロジェクト」に応募し、本研究を継続したい。次のような研究計画を構想している。

- ・今年度の成果・課題をふまえた授業改善を行い、その授業実践を省察する。
- ・受講学生へのアンケートを行い、2021年度と比較検討する。
- ・2021年度から継続する授業協力者へヒアリング・アンケートを実施する。

以上のような調査・研究活動を通して、教育支援協働力の育成に向けたチームによる調査・実践研究活動の意義・方法、ティームティーチングによる大学院授業運営や協力者・団体との連携・協働、学生支援のノウハウを検証・明確化し、研究成果を修士課程全体で共有できるよう手引きとしてまとめる。

より質の高い大学院教育の実現に向け、大学院修士課程教育を担う大学教員の連携・協働や力量形成（FD）の観点、大学院カリキュラム全体における位置づけや他授業・活動との関連といった観点も新たに加えて研究に取り組む。